

## グリム童話におけるよい子・悪い子像の考察

水口 寿穂

### はじめに

筆者はクリスマス文化を専門に研究をしている。筆者が子どもの頃、よく「いい子にしていないとサンタさんは来ないよ」と周りの大人に言われていた。どのみち敬虔な仏教徒の我が家においてはサンタクロースが来ることなど無いのだが、それを口実にクリスマスの時期だけ、いつもより余計に家の手伝いをさせられた記憶がある。クリスマスが過ぎると「手伝いをしない悪い子にはお年玉はない」と母親に言われ、正月が終わるまでの間、家の手伝いに明け暮れる日々が続いたことは全くの余談である。さて、日本にクリスマス文化をもたらしたアメリカを見てもやはり、よい子には褒美が、悪い子には罰がクリスマスには与えられるという考えが、記録を手繰ってみると19世紀にはあったようである<sup>1)</sup>。しかし21世紀現在、実際のクリスマスの様子を見ていると、この観念はどうもとりあえずのものであるらしく、クリスマスに罰を与えられたことがあるという子どもは、少なくとも日本では見聞きしたことは無い。

クリスマスに贈り物をもたらすギフトブリンガーを調べていると、特にドイツやフランス、イタリアでは罰を与えるギフトブリンガーが多く存在し、罰の内容もより具体的になってくることがわかる。いくつか例を挙げると、フランスのある地方では悪い子への罰として血の滴るロバの耳や動物の内臓がプレゼントとして部屋にまき散らされていたり、木の鞭が贈られたりする。イタリアにおいては悪い子には石炭が贈られるという。最近ではクリスマスシーズンにイタリアへ行くと、石炭を模したチョコレートがそこここで売られている。このお菓子は罰として子どもたちに贈られるのか、はたまたイタリア特有のクリスマスプレゼントとしてたがいに送りあうのが通常になっているのかは興味深いところではある。また、ドイツにおいては、リープクネヒトやシャープ、克蘭プスといった罰を与える専門のギフトブリンガーが、サンタクロースないし聖ニコラスと対になって町へやってきて、観衆を鞭で打って回る。鞭で打っても態度が改まらないような子どもは、背負ってきた袋に詰められ、川に捨てられることもあるという。

こうしたことを調べていると、ある疑問が浮かんでくる。どういう子がよい子で、どういう子が悪い子なのかという点である。当然ながらよい子、悪い子というのは親をはじめとする大人から見ての判断になるであろうし、時代によって家族の在り方も変化しているのだからこそ、基準も異なってくるであろう。今回は、『グリム童話集』——正しくは『グリム兄弟によって集められた子どもと家庭の童話』——を歴史的資料として捉え、19世紀ドイツにおけるよい子像、悪い子像がそれぞれどういうものであったのか、当時の子ども観について見ていきたい。

## 1、テキストの選出方法

本研究では、より子ども同士の違いが強調されているメールヒェンに注目する。というのも、口伝のメールヒェンには語り手の様々な思いが織り混ぜられているものであるが、子ども同士が比較されている話は、より高い教育的意図を含んでいると考えた為である。その為、グリム兄弟によって編纂されたグリム童話集の第7版を読み込み、以下の基準で取り扱う話を選出した。

- 1、子どもがふたり以上登場する
- 2、「子ども」の基準は、話の始まりにおいて親から自立しておらず、未婚である若い人物とする
- 3、その子どもらは性格や容姿が対照的である
- 4、同じ課題に取り組むことになり、成果が比較される
- 5、話の結末において、幸福になる子と不幸になる子とに分かれる

以上の基準に当てはまるメールヒェンは、KHM13「3人の小人」、KHM24「ホレのおばさん」、KHM57「金の鳥」、KHM64「黄金のがちょう」、KHM91「地もぐり一寸法師」、KHM97「命の水」、KHM101「クマの皮を着た男」、KHM130「一つ目、二つ目、三つ目」、KHM135「白い嫁ごと黒嫁ご」、KHM166「強力ハンス」、KHM201「森の中のヨーゼフ聖者」の11話である<sup>2)</sup>。

なお、原語テキストとして『*Kinder - und Hausmärchen — gesammelt durch die Brüder Grimm* — (Vollständige Ausgabe)』(München: Artemis&Winkler, 1991)を使用し、日本語訳は金田鬼一氏の翻訳による『完訳 グリム童話集』(岩波書店、1979)の第1巻から第5巻を参照した。金田の訳が意識すぎて原文本来の意味とかけ離れすぎていると判断した場合にのみ、原語引用部分の直後に括弧書きで筆者による日本語訳を記載している。

## 2、比較及び考察

偶然にも、本稿で取り上げた話はいずれも同性同士が比較される話ばかりとなった。それらの話を見ていくと、男の子同士が比較されている場合と女の子同士が比較されている場合とでは、話の構成に多少の相違点が見えてくる。男の子同士が比較される話では、比較されるのはほとんどが3兄弟であるのに対し、女の子同士が比較される話においては母親にとっての実娘と継娘である話が大半であったというのが、ひとつ目の相違点である。次に、話の進み方も異なってくる。男の子が比較される話においては、どの話も与えられた課題をクリアしなければ次の課題へと進むことができないが、女の子が比較される話では課題を的確にこなせなくても次の課題へと進むことができる。加えて、幸福な結末を迎えるために必要になってくる条件が男の子の話と女の子の話とではにわかには異なっているようである。これはグリム兄弟がこれらの話を編纂した19世紀以前は、それぞれの性によって求められていた資質や能力が異なっていたためではないかと考えられる。そのため、男の子が比較されている話と、女の子が比較されている話とに分けて記述していくこととする。

また、成功をおさめ幸福な結末を迎える子どもを、親から見てこうあるべきという親の望む理想の子ども像としてのよい子とし、不幸な結末を迎える子どもをこうなってはならないという見本の

悪い子とする。

## 2-1、男の子同士が比較される話におけるよい子・悪い子像

男の子同士の比較が行われていたのは、KHM57、64、91、97、166の5話である。ここで比較されている子どもたちは、KHM166以外の話においては3人の兄弟であり、KHM166では主人公ハンスとそのお供ふたりの計3人が比較対象となっている<sup>3)</sup>。

まずはよい子とされる人物像について見ていこう。KHM57でよい子として描かれているのは3人の王子の末っ子である。この少年は父親からあまり信用されてはおらず、また兄たちからもあてにはされていない。しかし大変に素直であり、森で出会ったキツネの助言を疑うことなく受け入れている。他人を疑うことを知らない為、兄2人に殺されかけるという場面もあるほどに素直な人物である。KHM64は木こりの3人兄弟が比較されており、これも成功をおさめるのは末の弟である。金田の訳では「抜け作」という名前になっているこの人物は、周りの者から侮られバカにされている。しかし、森で出会った小人に食べ物を分けてくれと頼まれると、あまり良いものではないが、と言いつつも分け与えてやっている。その結果、後から出てくる課題をこなすためにその小人の手を借りることができ、最後には姫と結婚することができる。KHM97も3人の王子の末っ子が成功者として描かれている。この王子に関しては記載が少ないが、小人の質問にきちんと答えたため、礼儀をわきまえている人物として小人から命の水を得るための助言を得ることが出来る。

3人兄弟の中でも成功を取めるのはなぜか決まって末っ子であり、また周囲から馬鹿扱いされているという点は、この3つの話に共通している。では、ここで言う「馬鹿」な人物はどういう人物なのだろうか。KHM57では、主人公は性格の悪い兄2人のいう事を疑いもせず信じているし、自分を殺しかけた兄たちを助けようとする場面さえ見ることができる。KHM64の主人公は自分のものを他人に分け与えるような、傍から見ると優しい人物であるが、これが馬鹿扱いされている。KHM97の末の王子は、皆がまともに相手にしないような小人に対しても礼儀正しく接している。これらの表現から推測するに、この3つの話における馬鹿な人物とは、損得勘定によって付き合う人や取り組むことを選別せず、たとえ自分が損をすることになっても目の前の困っている人物を自然に助けやめるような、素直な人物の事ではないだろうか。彼らは結果として、恩を感じたキツネや小人の助けを借りることができ、そうして与えられた課題を最後までこなすことができるのだ。

だが、KHM91やKHM166ではよい子として描かれている人物は必ずしもこうした性格ではない。むしろ先に取り上げた3つの話とは、正反対ととってよいような人物像である。KHM91では主人公は小人に頼まれてパンを与えている。しかしその与えられたパンを小人が床へ落とし、拾ってくれと主人公にせがむが、主人公は小人を叱りつけ、殴りつけている。KHM166も、小人に頼まれてスープの肉を二切れまでは分けてやるが、三切れ目からは断り、癩癩を起した小人を殴りつけている。その結果、どちらの話も小人から問題解決の糸口をつかむことが出来るのだが、他の三話と対照的に暴力によって情報をもぎ取ったようにも感じられてならない。このKHM91の主人公の行為に関して、ユング派の心理学者である河合隼雄氏は次のように述べている。

この主人公ハンスは、竜の退治をするような積極的な男性であることは明らかであるが、小人に対しても、自分のパンくらいは自分でひろえ、といかにも男性的な親切を發揮するところが興味深い。パンをやるのまではいいが、相手の言う通りパンを拾ってやるのはやりすぎなのである。

(河合隼雄『河合隼雄著作集第5巻——昔話の世界——』東京 1994 岩波書店 p227、

初出：河合隼雄「昔話の残酷性について」『メルフェン』6号 東京 1982 チャイルド社)

確かに主人公は、“kannst du dat Stücke nig sulwens wier up nümnen, wenn du die de Möhe nig mal um dine dägliche Narunge giewen wust, so bist du auck nich werth, dat du et etest. (自分の命をつなぐものを捨てる事さえできないなら、それを食べる価値なんかない)” [Grimm : 1991 : p.462] と発言している。もしこの発言が無ければ、主人公はただ感情のままに暴力をふるう危険な人物でしかないだろう。しかしこの言葉によって、小人を殴るという行為が相手のことを考えての行動であると判断することができる<sup>4)</sup>。河合の述べる「男性的な親切」というものに関してはまだまだ考察する余地がありそうだが、単純に言葉を受け止めるならば、本人の命を脅かすような行為は叱ってやるのが優しさというものなのであろう。KHM166では要求をエスカレートさせていく小人を殴りつけている。この行為は単純に、過剰な要求を断っていると捉えることもできるだろうが、先ほどの話と同様に「男性的な親切」を当てはめて考えるのであれば、他人の食料を根こそぎもらってしまおうとする小人の礼儀に欠けた行為や、食料を簡単に手に入れようとする軽率さを叱っていると捉えることもできるだろう。このふたつの話の主人公は先の3話とは一見正反対の性格をしているように見えがちだが、こうして考えてみると、その行動の根本には優しさを見出すことができる。そしてこれらの話もまた、主人公の優しさに起因する行動によって小人の助けを得られるのだ。

このようにして、ここで取り上げたどのよい子たちも、キツネや小人という援助者の力を借りながら、与えられた課題を次々とクリアしていく。たとえ失敗しても、キツネや小人によって救済措置がとられ、成功へと導かれる。そしてみな、最後には姫と結婚し、王として国を治めたり王の跡継ぎとなったりし、地位と権力を手に入れるのである<sup>5)</sup>。

次に、悪い子になっている人物の特徴を見ていこう。KHM57の兄2人は、自分は利口であるという考えがあるからこそ、自分が何かに失敗することなどという考えははなから無く、だからこそキツネの助言を耳にとめることが出来ない。その結果、最初に宿をとった村において足止めをされ、ありとあらゆる悪事を働き、金銭をすべて失い、絞首刑になりかける。そこを助けた末弟が目当てにしていた金の鳥を手に入れたのを知ると、それを妬んで末弟を殺害し——奇跡的に末弟は助かるのだが——、末弟の手柄を自分たちの手柄と偽る。しかし最後には事の真相を知った父親に処刑される。KHM 64における兄2人は、長男は“Der kluge Sohn” [Grimm : 1991 : p.367] (「あたまのいいむすこ」[金田 : 1979 : 2巻 : p.294]) で次男は“ganz verständig” [Grimm : 1991 : p.368] (「ちゃっかりした男」[金田 : 1979 : 2巻 : p.295]) と記述されている。だからなのか、小人にねだられても食べ物を分けてやることはない。頭がよくてちゃっかりしている兄たちは、メリットのなさそうな無駄なこととはしないのだ。それどころか嫌味を言って小人を追い返してしまう。その結果、小人の呪いにより、斧が腕や足に当たって大けがをし、仕事が出来なくなる。この兄2人は、主人公が森へ入って以降、登場しなくなる。KHM91の年上の狩人2人は、登場時は小人のいう事をホイホイ聞いてやる、一見優しそうな人物である。しかし一番若い狩人が小人から痛い目に遭わされることなく姫が捕らわれている場所を聞き出すと、嫉妬心をあらわにして若年の狩人の殺害を企てている。この2人は殺人未遂の容疑で処刑される。KHM97の兄2人は命の水を手に入れて父親のお気に入りになる事を考えている人物である。命の水を探しに出た道すがら、小人に話しかけられるが、彼らは「いばりくさって」[金田 : 1979 : 3巻 : p.182] (“der Prinz ganz stolz” [Grimm : 1991 : p.486]) 小人に罵

声を浴びせ、相手にしない。そのせいで小人に呪いをかけられ、身動きが取れなくなる。小人に「腹黒い」[金田：1979：3巻：p.183, p.185] (“(末弟に対して) …, nicht übermüthig wie deine falschen Brüder,” [Grimm：1991：p.487]、“weil sie so übermüthig waren.” [Grimm：1991：p.488])、「高慢ちき」[金田：1979：3巻：p.185] (“sie haben ein böses Herz.”<sup>6)</sup> [Grimm：1991：p.488]) などと呼ばれているこの兄2人は、末弟に助けてもらったにもかかわらず、末弟が手に入れた命の水を海水とすり替え、さらには末の弟が父親を毒殺しようとしたと吹聴する。しかし、自分たちがしでかしたことがばれるや否や、船に乗って海へ出てしまい、行方知れずとなる。KHM166のおとも2人は、留守番の最中に現れた小人に、食事の肉を分けてやることは無い。そのせいで小人にボコボコにされるが、他の者も自分と同じような目に遭えばいいと考えて注意喚起をしない。しかし、小人からの災難を逃れた主人公を妬ましく思い、主人公が姫を救出した際に主人公の殺害を企てている。姫を連れて小舟で海に出るが、追いついた主人公によって船の上から突き落とされる。

さて、悪い子に見られる特徴をまとめると、自分が賢いと信じているがゆえに他者に高慢な態度をとる (KHM57, 64, 97)、自分の利益のみを追求し他者へのほどこしをしない (KHM64, 166)、うまくいっている者を妬み殺害し、手柄を横取りしようとする (KHM57, 91, 97, 166)、というふうになる。中でも目立って共通している点は、うまくいかなかった場合には成功者を妬み、殺害しようとする点であろう。特に KHM57 と KHM97 においては、殺害対象が命の恩人でもある人物だ。こうした高慢で、簡単に嫉妬心に行動を左右される悪い子たちはみな、最後には命を失うか、体が不自由になるかして消えていく。

ここまで見てきた男の子の話におけるよい子と悪い子の特徴について、端的にまとめよう。最終的に成功を収めるよい子の主人公はみな、その行動にこそ差はあれ、目の前に現れた人ならぬ存在——キツネや小人——に対して優しさを示している。そのことによって、課題をこなすために有利な情報をそれらの存在から得ることができるし、場合によっては手を貸してもらうこともできる。要するに、優しさを示すことによって援助者を手に入れているのである。しかし、途中で課題にひっかかって前に進めない者たちはみな、その高慢な性格ゆえに援助者を手に入れることができない。それどころか、援助者になるはずの存在を敵に回してしまう。挙句の果てに、自分が見下していた人間が成功を収めると、KHM91 に登場するような一見優しそうな人物でさえも嫉妬心をあらわにし、徐々に行動が悪い方へと変化していく。いや、むしろその隠れていた悪の部分が徐々にさらけ出されていく、とした方がよいのかもしれない。人間である以上、嫉妬心は誰しもが感じるものである。自分の感情に嫉妬という名をつけることには抵抗はあるだろうが、しかし誰しも一度は誰かをうらやましく思う感情と共に嫌な気分を感じたことはあるだろう。こうした感情が芽生えた時に、その感情をうまく処理するか、嫉妬心に突き動かされるがままに行動してしまうかによってその後の運命が左右されるのは、ここで取り上げたメルヒェンだけでなく現実世界においても共通することである。

男の子の話においては、すべての課題を成し遂げるには援助者の存在が大きなカギとなっている。この援助者を味方につけられるかどうかによって、成功の道か死の道かが分かれてくる。すなわち、男の子の話において必要なのは、力を貸し助けてくれる周りの存在と、そんな仲間を手に入れることのできる力であると言えるだろう。グリムがこれらの話を編纂した19世紀初頭では、まだ男性優位の社会であり、男性は家族の主や、立場によっては職場や集落のリーダーとして周囲をまとめ管理することが必要とされた時代である。そうした時代において求められる人材というのが、まさに

ここで描き出されているような、何かあった時に助けてくれる者を身近に作るができる人間だったのであろう。

## 2-2、女の子同士が比較される話におけるよい子・悪い子像

女の子同士の比較が行われているのは、KHM13、24、101、130、135、201の6話である。義理の姉妹同士での比較だと2人姉妹、実の姉妹間での比較だと3人姉妹になっているところは興味深い。また義理の姉妹の場合、よい子として描かれるのが決まって母親にとっての義理の娘であり、悪い子として処罰されるのが母親の連れ子であるのも面白い部分である。初版ではそうではなかった話も、7版に至るまでにグリム兄弟によって義理の親子へと書き換えられている。これらの描写にはグリム兄弟による何らかの意図があるのだろうが、この点に関しては既に多くの研究があるようなので、あえてここで触れることはしない。この章においても、よい子と悪い子とに分けてその特徴を考察したい。

まずはよい子たちから見ていこう。KHM13における主人公は父親の実娘であり、彼女は“schön und lieblich (美しくて愛らしい)” [Grimm: 1991: p.108] な娘である。また、継母に言いつけられて真冬の森へ入った彼女は、出会った小人たちにあいさつをし、小人たちの家で暖を取らせてもらう代わりに頼まれごとを快く引き受ける。その行動を見た小人たちは彼女の事を“es so artig und gut (彼女はこんなにも礼儀正しくてよい子だ)” [Grimm: 1991: p.109] と述べ、小人たちから美しさ、金貨、王子との結婚という3つの幸福を授かり、さらには母親に言いつけられた山苺も小人の家の前で手に入れる。KHM24では、未亡人の母親と娘二人が登場する。片方は母親の実娘で、もう片方は義理の娘であり、この義理の娘が主人公になっている。彼女は“schön und fleißig” (「うつくしくて働きもの」 [金田: 1979: p.253]) であり、継母たちと暮らしている時は継母に言いつけられた仕事を懸命にこなすが、ひどい扱いを受けている。ホレ婆さんの住む世界へ行った時にはパンやりんごの木、またホレ婆さんに言いつけられた仕事を一所懸命にこなしたため、ホレ婆さんから大事にされ、家に帰るときは体中に黄金をくっつけられて返される。KHM101では、主人公は男性である。しかし、話の中盤からヒロインとして出てくる娘に焦点を当てると、実姉2人との比較が行われている。父親の約束を果たすために主人公と結婚した娘は、父親の顔を立てる従順な娘であり、一向に帰ってこない主人公をただ待ち続ける貞淑な女性として描かれている。彼女は姉二人にどれだけからかわれても、主人公を待ち続けた。そうして最後には、お金持ちになって帰ってきた主人公と豊かな生活を送ることになっている。KHM130でよい子として描かれているのは、3人姉妹の次女である。この娘はたいそう美しくはあるが、見た目が普通の人間と同じという理由で、母親や他の姉妹からいじめられており、粗末な生活を送っていた。ある日原っぱでヤギの番をしながら泣いていると、不思議な力を持った女性が現われ、何かと彼女を助けるようになる。そのおかげで、たまたま通りかかった王子に与えられた課題を難なくこなすことができ、王子と結婚する。KHM135におけるよい子は母親にとっての義娘である。ある日、みすぼらしいなりをした老人に村までの道を聞かれたとき、素直に道を教えるだけでなく、行き先が違うにもかかわらず村まで案内した。その老人は実は神様で、娘は道案内の見返りとして、美しさ、金銭、死後の天国行きの確約という3つの幸福を授かり、果てには王子と結婚する。KHM201では、ヒロインは3人姉妹の末娘であり、信仰心に篤い娘である。森の中で聖ヨーゼフに宿を借りた時、食べ物を聖ヨーゼフに多くいくように分け与え、ベッドを使うことを遠慮するなど、年老いた体を気遣う娘である。この末娘はお金の入った大きな

袋を手に入れ、家に持って帰る。次女も末娘ほどではないが、それなりに聖ヨーゼフを気遣った行いをするため、手で持てるほどの大きさのお金の入った袋を持って帰っている。しかし、その袋を母親に渡す前に何枚かちゃっかりとくすねているところや、食べ物をきれいに半分にして渡すところ、またベッドを聖ヨーゼフと一緒に半分ずつ使おうとするところなどは、なかなかの親近感のわいてくる人物ではある。

これらの話においてよい子とされている女の子は、KHM13、24、135は父親の娘であり、母親にとっては継子ということになっている。KHM130、201では母親の実の娘ではあるが、母親から毛嫌いされている設定になっている。どちらにしろ、母親である人物から疎ましくされている存在だ。ちなみに、KHM101では母親は既に亡くなっているのか登場しないし、また特に親子関係に関する記述は見られなかった。こうした母親から嫌われているよい子たちにある程度共通して見られる特徴を挙げていくと、美人であり（KHM13、24、130、135）<sup>7)</sup>、事情はどうであれよく働く（KHM13、24、135<sup>8)</sup>）、目上の人を敬い気遣う事ができる（KHM13、24、101<sup>9)</sup>、135、201）、与えられた仕事を完遂することができる（KHM13、24、101<sup>10)</sup>、130、135、201）といった点だろう。彼女たちはその行いの結果として、金銭や暮らしに全く困ることの無い生活を手に入れる。KHM24とKHM201以外の話では、王子ないしお金持ちとの幸せな結婚というイベントも随伴している。

今度は悪い子として描き出されている娘たちを見ていこう。KHM13において主人公と対比されている娘は、主人公にとっての義姉妹であり、母親の実の娘である。こちらの娘は実の母親から見ても“*häßlich und widelich*（醜くて嫌悪感を抱くほど）”[Grimm：1991：p.108]な見た目をしている。この娘は小人に福をもらって帰ってきた義理の姉妹をうらやましがり、自分も森へ行きたいと言います。森に住む小人の家を見つけた時、ノックや挨拶もなく勝手に家に入り込み、暖炉の前に座って食事をとり始める。小人に食べ物を分けるよう頼まれた時には「自分でも足りていないのに、なぜ他人に分けてやらなければならないのか」とはねつけ、戸口の前を掃除するように頼まれたときも「自分は召使いではない」とつっぱねている。そして小人たちが自分に何もくれなさそうなのを察知すると、さっさと家へ帰っている。この様子を小人たちは“*es so unartig ist und ein böses, neidisches Herz hat, das niemand etwas gönnt*”[Grimm：1991：p.110]（「ぎょうぎは悪いし、じぶんは他人に物をやらないくせに、ひとばかりうらやましがる根性まがり」[金田：1979：p.146]）と述べ、この娘に3つの呪いをかける。物語の中盤以降、主人公が王子の妃になることが決まると、醜い娘は実母の手をかりて主人公を殺害し、自分が妃になり替わる。この娘は最後には悪い行いが王子にばれて、処刑される。KHM24も主人公の義理の姉妹が主人公と対比されている。この娘も“*häßlich und faul*（醜くて怠け者）”[Grimm：1991：p.169]であり、無理やり行ったホレ婆さんの国でパンやりんごに助けを求められても手を貸すことはない。ホレ婆さんの家においてもまともに働いたのは一日目のみで、三日目には寢床から起きてこなかった。その結果、こちらの娘はホレ婆さんから“*Pech*”<sup>11)</sup>[Grimm：1991：p.171]を大釜いっぱいぶっかけられ、お払い箱にされている。これは一生涯体にこびりついてはがれなかった。KHM101においては実姉ふたりが悪い子として描写されている。姉ふたりは、父親が娘の結婚相手にと連れてきた恩人が熊の皮を着た汚らしい男であったため、男のことを悪しざまに揶揄した挙句、結婚を突っぱねている。それどころか、父親のいう事に従順に従って一見損と思われるような結婚をした末娘をからかい、嫌味を言っている。しかし、何年もの後お金持ちそうななりになって戻ってきた末娘の夫に、そうとは気づかずに、今度

は愛想よく媚を売るのだ。彼女たちはこの若者が末娘の夫であると知った時、悔しさのあまり自殺してしまう。KHM130でも、比較されているのは実の姉と妹である。目がひとつの姉と目が3つある妹はこの主人公を自分たちと見た目が異なるという理由からいじめており、食べ物も衣類もいいものは自分たちで取り上げ、主人公の娘には残りくずしか行かないようにしているし、主人公が良い思いをしないようにしくむのが常である。王子が現われた時には、嘘をついてまで王子に気に入られようとする。最後には食べる物にさえ困るほどの貧しい生活に陥るが、王子と結婚した主人公に助けられ、改心している。KHM135では、義姉妹が比較対象となっている。道を聞いてきた老人に対し、母親と一緒に嫌味を言った娘は黒く醜くなる呪いをかけられ、福を授かった主人公を憎みいじめるようになる。果てには、美しさによってお金持ちと結婚する主人公を母親と共謀して殺し、自分が花嫁になりすます。最後にはその悪事がばれて、母親ともども処刑されるという結末を迎えている。KHM201では他の話とは異なり、3人姉妹の行いや性格の程度において段階的に差がつけられている。末娘は天使の守護が得られるほどに“frommes gutes Kind” [Grimm : 1991 : p.811] (「信心のあつい、善い子」[金田:1979:5巻:p.217])で、次女はよい子ではあるが自分がまるっきり損しないための要領の良さも持っている娘であった。これに対し、母親から一番かわいがられている長女は“unartig und böse (礼儀知らずで悪い子)” [Grimm : 1991 : p.811] である。他人に自分のものを分け与えることをしないし、ベッドを譲られたときも遠慮がない。にもかかわらず、自分が他人からものをもらうことに関しては抜け目がない。その上見栄っ張りであり、母親に嘘をついてまで自分をよく見せようとしている。最後には母子ともども、森の中で蛇にかまれて死んでしまう。

これらの話における悪い子の特徴を羅列していくと、怠け者で面倒くさがり (KHM13、24、135)、不美人 (KHM13、24、130、135)、礼儀知らず (KHM13、101、135、201)、楽をして他人のものをもらおうとする・楽をしていいおもいをしようとする<sup>12)</sup> (KHM13、24、101、201)、殺害となりすまし (KHM13、135) といったものになる。また、母親の登場しない KHM101 以外の5話においては、悪い子は共通して母親に非常に可愛がられており、生活は母親に依存している。悪だくみをする時でさえ、母親に考えてもらって母親に実行してもらっている。ここまで母親に依存しきっている状態はむしろ、母親に娘がコントロールされていると言っても過言ではないだろう。いわば、悪い娘は全く母親から自立していないのである。こうした母娘関係について、心理学者の河合は次のように述べている。

魔女は自分の娘が何かを欲しがるとき、それはどんな手段を用いても手に入れてやろうとするのだから、この母＝娘関係は極めて密接である。[…中略…] 若い乙女が恋人を得て、結婚に至ろうとするとき、密接な母＝娘関係の終り(死)を体験しなくてはならないことを意味しているのではなかろうか。乙女にとって結婚はひとつの死の体験であり、乙女は死んで妻として再生しなくてはならない。

(河合隼雄『河合隼雄著作集第5巻——昔話の世界——』東京 1994 岩波書店 p230、

初出：河合隼雄「昔話の残酷性について」『メルフェン』6号 東京 1982 チャイルド社)

ここで取り上げた女の子の話では、6話中4話 (KHM13、101、130、135) において、結婚がとりあげられている。本稿で取り上げた男の子の話においても、最後には王女と結婚して幸せになりました



た、という結末にはなっているが、男の子の話において結婚自体は主人公の冒険譚の付録のようなものである。しかし、女の子の話では話の中盤に結婚というイベントが登場し、そこから先の困難や生活ぶりが後半部分で展開されていく。こうした点を考えると、結婚というイベントは女の子の話においては男の子の話の場合よりも重要視されていることがうかがえる。この重要なイベントに悪い母娘は、嘘をついたりよい娘を殺し花嫁になりすましたりして、むりやり乗っかろうとする。だが、河合の述べる「母＝娘関係」を終わらせることができなかったこの母娘は結婚生活がうまくいかずに、母娘ともども死んでしまうのだ。結婚イベントの出でこない上記以外の2話においても、悪い娘は一生とれないピッチをかぶせられたり（KHM24）、蛇にかまれて死んだりしている（KHM201）のだから、結局のところ結婚とは無縁な人生になっている。こうした母＝娘関係を終わらせられない、何をするにも母親がべったりくっついているこの悪い娘は、身の回りの事をはじめとすることを母親に依存しているのだから、当然ながら楽をすることが当たり前になっている。本来の生皮な性格やろくに家事仕事をしたこともないという事実がたたって、ろくな仕事ができない。KHM101なんかでは労働以前に、悪い娘ふたりは最初から金銭目的で付き合う人を選んでいる。男の子の話と違ってその行動や労働の出来によって報酬内容が異なってくる完全出来高制の女の子の話では、ピッチ（KHM24）や呪い（KHM13、135）や貧困（KHM130）、死（KHM101、201）といったものが、悪い娘の労働報酬として与えられる。

一方、結婚できたよい娘は、最初から実母が死んでしまって存在しないか、もしくは実母がひどく娘を嫌っているかしており、母親としての役割を果たす人物がいない。したがって、庇護者のいない娘が生きていくためには、自分が暮らす家を取り仕切る者の言う事に従順に従わざるを得ない。家事をし、家畜の世話をし、糸をつむぐことによって、娘がその家で暮らすだけの対価を労働という形で払っているのだ。

ではなぜ、結婚がここまで重視されるのだろうか。単に、結婚をして子どもを産むことが、女性としての幸せと考えられていたこともひとつの理由であろう。だが、よい女の子たちが幸福や黄金をどこでどう手に入れたかを考慮すると、他にも理由が浮上してくる。そもそも、悪い娘が他人のものを欲しがり楽をして手に入れようとするきっかけは、よい娘がその働きぶりを評価されて金銭や美しさを手に入れ、結婚するという一連の幸運を得たことにある。これらの運をどこで手に入れたかという、男の子の話に見られるように魔法のかかった古城の奥に探しに行ったとか、用事があって入った井戸の底で拾ったとかではない。小人や老人といった誰かのために働き、その見返りとして小人や老人らに——要は他者に——与えられたのである。加えて、結婚といっても、結婚相手は王子かどこぞのお金持ちで、特にその人物が好きで結婚したというふうもない。結婚してお金に困らない生活を手に入れたから幸せ、という描き方が大半である。こうした点を見ても、本稿で取り上げた女の子の話における結婚とは、経済的に困らないための後ろ盾を手に入れること、と捉えることができる。ここで取り上げた女の子の話においては、女の子が自分で知恵を絞って金銭を稼ぐ話はひとつもない。結婚話が登場しなかったKHM24とKHM201のよい娘は、黄金ないし金貨という大きな収入を家族に持ち帰っているが、この黄金や金貨はホレ婆さんや聖ヨゼフという、いわばパトロン的存在から手に入れているのだ。結婚を、経済的に困らないための後ろ盾を手に入れることというふうに捉えるならば、KHM24やKHM201の女の子も結婚と同様の出来事を経験していることになる。近代以前は、女ひとりで仕事をして生きていくことが難しい時代であったが、その社会世相がこれらの話に反映されているのだろう。誰かに与えてもらわなくては生きていけない

のならば<sup>13)</sup>、結婚は女の子にとって、その後の生死を左右する極めて重要なものとなる。そのため女の子の話においては、よりお金持ちの人物との結婚が望まれるのである。そして、その結婚するために必要な要素が、ここまで見てきたように、貞淑で働き者で家事全般ができる事であり、母親から自立している事なのである。

### おわりに

ここまで見てきたように、男の子の話と女の子の話とでは、求められている資質が異なっている。男の子には困難な課題に取り組むときに助けてくれる者を手に入れる力が、女の子には結婚するのに必要となる家事遂行能力の習得と母親からの自立が、それぞれ求められている。しかし、悪い男の子たちは高慢な性格ゆえに援助者どころか敵を作ってしまう、物事がうまくいかず、挙句には犯罪に手を染めてしまう。悪い女の子たちは、働かずして他人のものを手に入れようとばかりするため、結婚という最も大きな課題を乗り越えられない。そして男の子も女の子も悪い子は一様に、死かそれに等しい結末を迎えている。この結末が天から与えられた罰であると捉えるか、己の行動が招いた結果と捉えるかは難しいところではあるが、いずれにせよ悪い子には死が与えられるのだ。性別によって求められる資質や能力の違いは、本稿で取り上げた話が語られていた時代においては、それぞれの性別によって求められるものが異なっていたという事実を浮き彫りにしている。大人になった時に社会の中でうまく立ち振る舞う必要が出てくる男の子と、結婚後には家の中で家事の切り盛りをしていくことが求められていた女の子とでは、それぞれに必要な資質や能力が異なるのは当然のことであろう。

先にも述べたが、本稿で取り挙げ話は全て、その結末において幸福になる子どもと不幸になる子どもとに分かれている。こうした正反対の結末にたどり着く人物同士の対比が、悪い子のようなこういう行いをしていればこういう転落人生になるという教訓でもあり、またよい子のようなこういう人間になれるように育ちなさいという、この話を語って聞かせる親から子どもへの暗黙のメッセージでもあっただろう。筆者は子どもの頃、こうした対照的な二人が比較される話を見聞きするたび、不幸な結末に終わった人物と同様の過ちをしないように気を付けなければと思ったものであるが、中には最後には死んでしまう悪い登場人物を気の毒に思う子どもも、グリム兄弟の生きたころからいたのであろうか、KHM130では最後にいじわるな姉妹二人が気立てのいい主人公に救済される様子が描かれている。ひょっとすると、この話はグリム兄弟が編纂した話の中でも比較的近代に近い時代に収集された可能性もある。近代以前は、ろくな働きをしないごくつぶしは——たとえ家畜であろうが人間であろうが——、一家が食べていくことに困れば間引きされていた時代である。悪い子たちに下された処罰が厳しすぎると現代に暮らす我々が感じるようになってきたのは、死が生活の中から遠ざけられるようになってきたからだろう。

現代では、子どもが悪いことをしても、それに対して罰を与える事は家庭においても教育現場でも忌み嫌われるようになってきた。クリスマスにおいても、日ごろの行いが悪かったからと、罰を与えられる子どもは、筆者の知る限り存在しない。これは死が生活の中から遠ざけられるようになったことと、何か関係でもあるのだろうか。今後、機会があればこの点に関して考察していきたい。

## 註

- 1) Nissenbaum, Stephen: *"The Battle for Christmas"*, New York, Random House, 1997, p.70 ~ p.75 参照
- 2) 人物同士の比較が行われているが、その登場人物が最初から結婚していたり、途中から悪役が消えたりしたことで省いた話が、KHM11、21、29、53、56、106、107、126、142、146、156、165、182である。
- 3) KHM91 では最初、比較されるのは3人の狩人 ("Un et togen auck drei Jägerburschen ut, …", [Grimm: 1991 : p.461]) であったが、途中から「兄ふたり」 ("De beiden annern Broer" [Grimm : 1991 : p.462]) へと、記述が変化している。そのため、3人兄弟の比較の話と捉えた。
- 4) 念の為に書いておくが、叱りながら相手を殴るという行為は、現代日本では虐待行為もしくは暴力事件にあたる。グリム童話集が編纂された頃とは時代や国が違うこともあり、主人公の行為には現代では通用しないものも多い。また、いかなる理由があっても暴力をふるう事は犯罪である。このグリム童話や論文自体が、虐待行為ないし暴力行為を肯定するものではないことは、強調しておく。
- 5) 不思議なことに、主人公が機転を利かせて困難を乗り越えるような場面は特に見られないし、主人公が成功を収めることを熱望しているような様子もないのは、面白いところである。本稿で取り挙げなかったグリム童話には、主人公本人が権力者になることを熱望しており、主人公の機転によって成功を収める話も多々存在しているが、なぜか本稿で取り扱った比較が行われている話の主人公は皆、そういう性格ではない。最後には権力者となっているが、果たしてその結末は本人の意思だったのか、ただキツネや小人の考える幸福がそうだけなのかは疑問である。単純に無欲な人間がよしとされているだけとも考えられるが、この辺りの考察については別の機会に行いたい。
- 6) 直訳すると、「悪い心を持っている」となる。金田の訳がかなり意識されているようで、一見すると全く異なる部分のようではあるが、日独共に全く同じ場面における同じ部分の会話の小人の発言から抜粋したことを強調しておく。
- 7) このうち、KHM13 と KHM135 では、善き行いによって美しくなるまじないをかけてもらっている。このことから、女の子の話においては、心根の美醜がそのまま見た目の美醜とイコールになっていると考えることができるだろう。
- 8) わざわざ村まで道を共にするという行為も、一種の労働と捉えた。
- 9) 親子や夫婦は人として対等という考えが普及してきたのが現代であることを考慮し、主人公との約束を果たそうとする父親の意向をたてるという行為や、一向に戻らない結婚相手をたてて貞操を守るという行為も、目上の者を敬う行為と捉えた。
- 10) いつ戻るかわからない結婚相手を何年もの間ひたすら待つということが、末娘が与えられた課題であると判断した。
- 11) 金田の訳では「チャン」[1巻:p.259] となっているが、独和辞典で調べると、①(口語)不運、②ピッチ(石油やタールを煮出した時に生じる残留物)、③松やに、と記載されている。ピッチは、筆者は一度匂いを嗅いだことがあるが、熱したアスファルトの匂いを数倍きつくしたようなにおいであった。長時間かいていると頭痛や吐き気を感じる匂いである。また、松やにはひどく粘着質であり、以前誤って触った時には、何度石鹸をつけて洗っても簡単には落ちなかった。どちらだとしても、頭から大鍋いっぱいかけられれば悲惨であることには変わりない。まさに不運を頭から浴びたようなものである。
- 12) 男の子の話に見られるように、嫉妬心によって他人の手柄を横取りするのではなく、女の子の話では、相手に対して特に何かをしてあげるわけでもないのに、全くの他人から何かを与えてもらおうとする、という違いがある。しかも彼女たちが何か行動を起こす時は、後にもらえる見返りを大いに期待した上での事である。
- 13) これもある種の依存とすることもできるが、悪い娘たちが判断も行動も母親任せであったのに対し、よい娘たちは己で考え判断することを放棄してはいない。彼女たちは自分が寝泊まりする家の主の言いつけを完遂するだけの思考と判断力、そして行動力を有している。

## 使用テキスト

Brüder Grimm: *"Kinder - und Hausmärchen — gesammelt durch die Brüder Grimm — Vollständige Ausgabe"*, München: Artemis&Winkler, 1991

## 参考文献

- 河合隼雄「昔話の残酷性について」『メルフェン』6号、チャイルド社、1982（『河合隼雄著作集第5巻——昔話の世界——』岩波書店、1994収録）
- 金田鬼一訳『完訳 グリム童話集1』岩波書店、1979
- 『完訳 グリム童話集2』岩波書店、1979
- 『完訳 グリム童話集3』岩波書店、1979
- 『完訳 グリム童話集4』岩波書店、1979
- 『完訳 グリム童話集5』岩波書店、1979
- Bottigheimer, Ruth B., *"Grimms' Bad Girls and Bold Boys: The Moral and Social Vision of the Tales"*, Yale University Press, 1987（ルース・ボティグハイマー『グリム童話の悪い少女と勇敢な少年』鈴木晶ほか訳、紀伊国屋書店、1990）
- Rölleke, Heinz, *"Die Märchen der Brüder Grimm"*, Artemis Verlag, 1985（ハインツ・レレケ『グリム兄弟のメルヘン』小澤俊夫訳、岩波書店、1990）

(本学大学院博士後期課程教育人間学専修)